

慣習のみにとらわれて、相も変わらず昔ながらの不完全な楽譜を買い、薦め、使用している教師や学生が大多数、というのが悲しい現実である。

楽譜を印刷する

何を作るにもオートメーション化が進み、業種によってはコンピューターとロボットが人力をはるかに凌駕するようになった今日でも、楽譜が印刷されて市販されるに至るまでには、その工程の大部分を生身の人間が手でこなしているのが現状である。

英語やドイツ語のような言葉はタイプライターを使えば素人でも綺麗に書ける。複雑な日本語でさえ、ワープロを使って誰にでも読みやすい原稿を仕上げられるようになった。ところが楽譜に限ってはまだまだ手書きに勝るものはない。コンピューター制御の電子キーボードなどで、弾いた音が譜面としてプリントアウトされる、という便利な機種もあるにはあるが、本職の作曲家の使用に耐え得るものではない。

作曲家が書き下ろした作品の息吹を直接感じ、それを演奏に反映させたい場合、理論的にはその作曲家自身の手書き楽譜を使用するのが一番である。そんな時、モーツァルトやシューベルト、ショパンなどの手稿はとてとても整っている。バッハの書いた楽譜はそのままでも読みやすい方であるが、ピアノの右手のパートなど作品によっては「ト音記号」ではなく「ハ音記号」で書かれているため、慣れないと読みにくい。それに反してベートーヴェンの筆跡は、たとえそれが本人の手によって清書されたものであってもグチャグチャと判読しがたい場合が少なくない。しかし注意して読みさえすれば「正確さ」という点では決して人後に落ちない。フランク・マルタンというスイスの作曲家（一八九〇〜一九七四）のそれは、そのままでも印刷され

た楽譜なみに読みやすい。

しかし、何と言っても印刷された楽譜を使用するコンフオートは格別である。普段からそれに馴れ切っているため、いまさら何の感興も湧かなくなっているが…。

手書きの楽譜から印刷楽譜を作る際に一番繁雑で時間がかかる工程は、その作品を印刷楽譜用の紙のサイズに合わせ、割りつける計算である。それもとえば四百小節ある作品だから一ページに五段、一段八小節として、つまるところは十ページで完成！ という単純計算だけではすまないのだ。

まず現実問題として、各小節に書き込まれている音符の数が違う。たとえば、第三十四小節は音符が多いので五センチのスペースが必要だが、その前後の小節は全音符ひとつずつしかないから一センチですまそう、などと単純処理して印刷されたとしたら、非常に見にくい楽譜になってしまうだろう。なぜなら、目で見たい小節の長さの第一印象は、演奏者に対して間接的にもその時間的長さを暗示するからである。このバランスは初見演奏の時など大変に重要である。

オーケストラのスコアの割りつけも一筋縄ではいかない。場所によって使用される楽器の数が異なるからである。

楽章の終わりとページの終わりとが一緒になるに越した事はない。ピアノの楽譜やオーケストラのパート譜などでは、右のページが終わったところで人の助けを借りずに譜をめくる事が可能か、という点も割りつけの際に考慮される。



「見て美しい」楽譜に仕上げるためには、ひとつひとつの小節の中に存在する音符の数、音価、臨時記号の有無とその数まで含めて計算され、それらすべてがバランス良く配置されなくてはならない。歌曲のようにテキストが入る場合には、歌詞を構成するアルファベットが対応する音符の下に入りきるか、という事も忘れてはならない。

和音の構成音が縦一列に並びきらない場合にはどの音が右側、あるいは左側に配置されるか、等々印刷楽譜割りつけのルールを挙げだしたら切りがないが、それらは全て見やすい、見て美しい楽譜を製作する、という観点から長年の経験をもとに決められてきた事である。

これらのルールを遵守しながら各小節ごとに計算が行われ、いよいよ印刷原板が製作される。

昔ながらの、そして現在も行われている最も一般的な方法は、比較的軟らかい金属板に五線譜や音符を彫り込んで（打ち込んで）いく、というものだ。しかしこの方法では、本来の楽譜を原板上では左右対象に作らなければならない。（年賀状を版画で作ったことのある人ならばハハン、とすぐ理解していただける事と思う）当然ミスも出やすいし、また一旦ミスを打ち込んでしまうと、その校正が大変である。

その上この工法は体力的な見地からも、決して楽なものではない。音符や記号の型を金属盤に打ち込むために使用される金槌は、普通三百グラム程度の小型のものとは言え、ひとつの音符を打ち込むのにコンコンと二〜三回は叩かなくてはならない。という事は、一ページの原板を完成させるまでには「打つ」という動作だけでも、平均およそ二千回繰り返し返さなければならない事になる。

ウィーンにある世界でも有数の音楽出版社ドプリンガーは、この楽譜製作上のプロセスにおいて画期的なパテントを所有している。

ドプリンガー社のアイデアは、透明なフォイルの上に五線譜をひき、そこに音符や記号をハンコで押していく、というものである。こう書いてしまえば何のおもしろみもないが、この方式は印刷楽譜製作の歴史上、偉大な一歩である。

この際に使用されるインクは「遮光性と速乾性に優れ、ミスした場合には簡単に消せる」という、特別のもの。使用されるフォイルの種類それぞれに対応して作られるこのインクの成分こそ、最大の企業秘密なのである。

五線譜はフォイルの裏に書かれ、それ以外の音符や記号等は表に押されていくので、たとえミスを消しても一緒に五線まで消えてしまうような事はない。透明だからその下に方眼紙を敷いて、タテの線を揃えたり横のバランスの割り振りを簡単にチェックできる。左右逆に原板を作る必要も全くない、という便利な方法だ。

完成した原板フォイルは、その後薬剤を塗ったアルミニウムの薄板に紫外線によって青写真のように転写され、それをそのままオフセット印刷機に装着すると、印刷楽譜の量産態勢が即座に出来上がる。

比較的単純な楽譜でも、一ページ分の原板フォイルを完成させるまでに六時間以上かかるといふ。楽譜の割りつけなどがある程度こなせるコンピュータプログラムも開発され、韓国などでその利用が盛んである。しかし見やすく、しかも美しい楽譜を製作できるプログラムは、それ自体も、必要なデータも繁雑すぎて、操作をしている暇があったら本職の人が自分の頭で考えて、手で作ったほうがよっぽど速く、かつ美しく仕上がるのだそうだ。

その職人さんが一番困ってしまうのは作曲家による追加訂正である。音が違うのを直すぐらいは朝飯前だが、小節数が増えたり減ったりするのには泣く思い。一番手間と時間のかかる割りつけ計算を全部やり直さなくてはならないからだ。